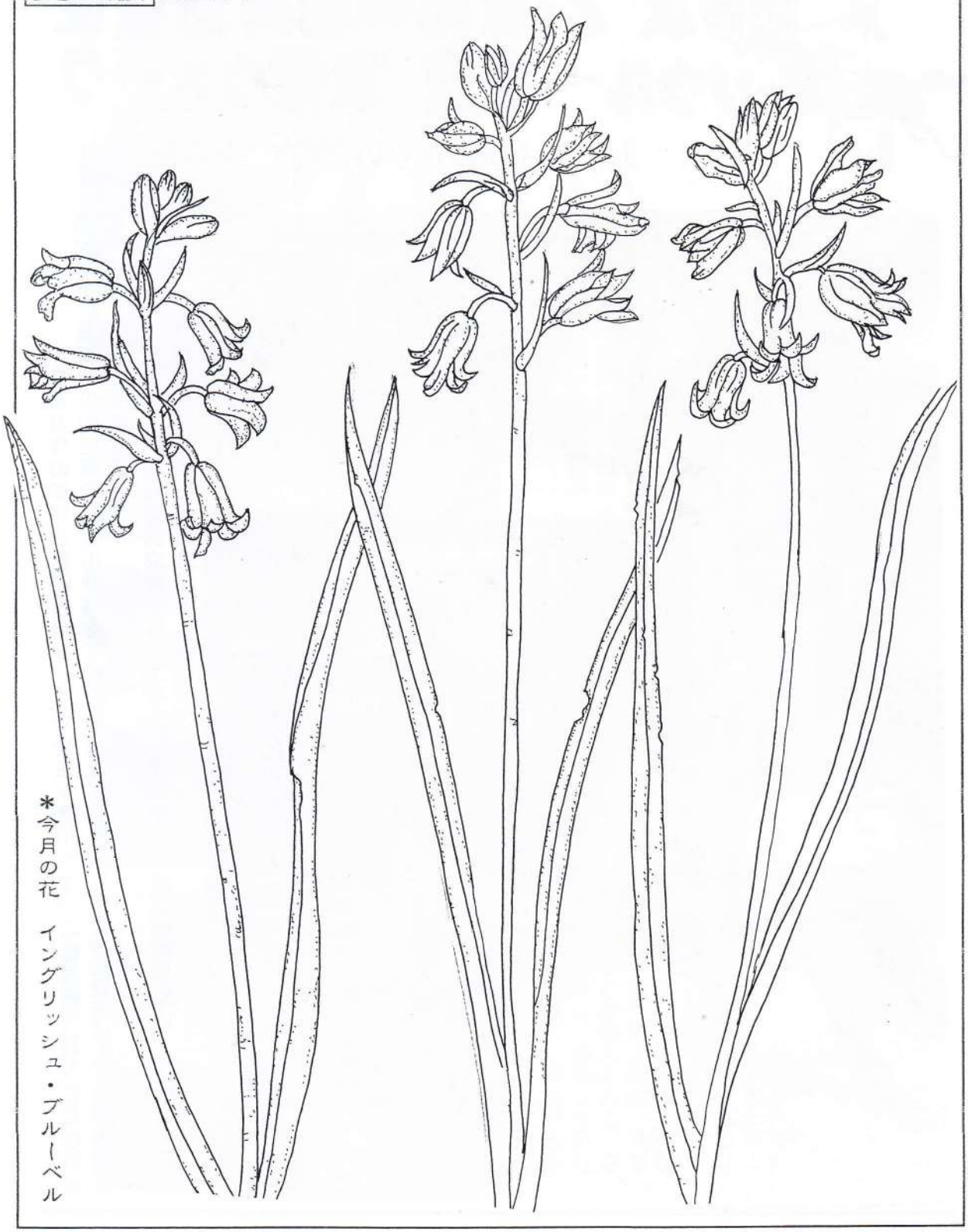
日本と朝鮮

2023.5

愛知版 No.471



＊今月の花　イングリッシュ・ブルーベル

第9次 21世紀の朝鮮通信使 ソウル～東京 友情ウォーク

5/8 名古屋ゆかりの寺院で 交流会

記念高札

一六五五年の朝鮮通信使行列を、尾張藩主・徳川光友がこの場所で迎えたとされる名古屋市中区橘の七面山妙善寺で除幕された、「現代の朝鮮通信使あいち」（平山良平代表）製作の高札。

左手前の標柱『誠信交隣』は、二〇〇七年（第一回朝鮮通信使来日　四百年）に東海地方朝鮮通信使研究会が建てたもの

通じ合う信義、今こそ

四月一日、韓国ソウルを出発した『第9次二十一世紀の朝鮮通信使ソウル～東京　友情ウォーク』一行が五月七日に愛知県入りした。

五月八日には、名古屋市中区橘（たちばな）の七面山妙善寺で、市民団体「現代の朝鮮通信使あいち」メンバーと橘町内会の面々と交流会が開かれた。

写真①は、一行が七面山妙善寺に到着したときの様子。

②は境内で挨拶する一行の韓国側代表、宣相佳さん（社団法人韓国體育振興会会長）。

衣装は「現代の朝鮮通信使あいち」が準備した。横に、除幕を待つ高札がある。

③は境内に集う、町内会の面々の『橘』を染め抜いた法被姿。

④は妙善寺本堂前での、永田亮遠住職を中心にした集合写真。

一行はこのあと、近くの「崇覚寺」に移動し、同寺所蔵の朝鮮通信使行列屏風を観覧、その由緒説明役を小出が行った。

この様に、一行は立ち寄り先各地で歓迎され、地元民と交流。『ウォーク』一行の日本側代表の遠藤靖夫さん（NPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会理事）によれば、自治体関係者の出迎えもある、という。一行は、出発してから五三日目、東京に到着する予定。

（小出）

【写真提供＝平山良平氏】

鑑賞のおすすめ

朝鮮文芸

【その　85】

韓国映画

『飾り（ノリゲ）：彼女の涙』

（2014年）

監督：チェ・スンホ

女優自殺の真相究明、克明に
韓国社会のタブーに挑戦

伊藤　一郎
koreamovieculture@yahoo.co.jp）
朝鮮文化を知る会

本作品の動画販売サイトでの日本語の題名は『おもちゃ虐げられる女たち』である。しかし映画を視聴したあと、その題名に気持ち悪い違和感を覚えたため、あえて筆者の和訳『飾り（ノリゲ）：彼女の涙』を本稿の題名に使用した。

本作品は、二〇〇九年に発生した韓国の女性俳優の自殺をベースにしているとされる。彼女は死の直前まで、所属していたプロダクションなどから性的接待を強要されていたという。

映画では、記者のイ・ジャンホを、『悪いやつら』、『犯罪都市』など数多くの韓国映画、テレビドラマに出演している韓国系アメリカ人のマ・ドンソク（注1）が演じている。韓国社会のタブー、また韓国芸能界の「慣習」を扱った作品の性格上、企業からの出資が非常に困難であったため、クラウドファンディングによって製作費が集められたという。極めて難しい題材を映画化した監督の勇気に敬意を表したい。

本作品のあらすじは以下のとおり。

ある女性俳優が自殺をした。記者のイ・ジャンホ（マ・ドンソク）のもとに、その自殺した女性俳優からある書類が届く。書類に書かれた内容からイ・ジャンホは、女性俳優の自殺に彼女が所属する芸能事務所の社長が関連していることを確信した。

しかしその後の取材は困難を極めた。取材の過程でイ・ジャンホは、感情のもつれから女性俳優の兄から暴力を受けたりするが、それらの困難を乗り越えて事件の真実を追求していく。そして担当の女性検事とも協力して事件のさらなる究明を図ろうとするが、予想外の妨害に直面する。

韓国社会における巨大な権力の闇は想像以上であった。女性俳優を死にまで追い詰めた芸能界、そして韓国社会の構造的問題にイ・ジャンホは挑戦し続けていき、ついに決定的証拠をつかむが・・・

本作品の登場人物の大部分を占めるのは男性である。女

性の痛みを理解しない無神経で、時には極めて卑劣な大多数の男性とほとんど一人で対峙しなければならない女性検事の苦しみは想像を絶する。

そして女性検事はある日、過去の自身への性的暴行をネタに裁判の担当から退くことを悪徳弁護士、悪徳裁判官、そして同僚の悪徳検事らに求められる。本作品で描かれている状況が、仮に部分的であっても事実としたら、韓国の司法は終わっている。また韓国社会も終わっている。

本作品のベースとなった事件後の二〇一八年ごろ、韓国ではセクシャルハラスメントを告発し、ジェンダー平等を求める運動が活発になった。世界的な#Me Too運動の流れを受けて多くの韓国人女性が立ち上がった（注2）。その一方でそれらの運動を「キャンセル文化」と決めつけ性差別や人種差別的な言動を正当化する言動も出始めた。それらは明らかな宗教的、極右の政治的背景、また潜在的な保守的国民感情をもって行われた。いうまでもなく性差別や人種差別的な言動は意見ではない。人の命を死にさらす犯罪である。またそれら卑劣な言動を弄する差別者等が、「表現の自由」を口実に自らの「差別を行うための権利」を主張した。特に昨今、SNS上において、一定の属性をターゲットとした誹謗中傷が放置されている現状がある。

長年にわたって公然とセクハラを行なってきたとされる「ノーベル文学賞候補者」の詩人は、一切の自己反省と謝罪をしないまま今年一月に文壇に復帰まで試みたという。次々に醜態を晒す有名人の姿に失望の念を禁じえない。それぞれの個人としての責任の他にも、それを許容してきた社会にも大きな問題があるであろう。また根本的な原因の一つは資本主義社会にある。

差別は金になる。人として最低限のモラルすらない資本第一主義に走る者らが社会を牛耳る限り、差別、そしてあらゆる抑圧は根絶できない。

（注1）筆者はマ・ドンソクの作品のほとんどを視聴した。独特の強面の雰囲気と意外な優しさのコントラストがある。一般的に言われる「味のある俳優」「個性派俳優」である。

（注2）二〇〇〇年代の初めから二〇一七年ごろまで「ノーベル文学賞候補者」として毎年名を挙げられ韓国文学のトップの地位にいた男性詩人は、常習的なセクハラが二〇一七年に告発され、その地位を失った。その振る舞いは六〇～七〇年代から文壇では公然の事実であったが、マスコミや文学関係者などはその事実に目をつむり、男性詩人を韓国文学のトップに祭り上げていたという。男性詩人は「在野の民主化運動家」として大統領にもなった人物と「民主化運動」を行なってきたとされる。男性詩人は、被害者に対して一切の謝罪をせぬまま、逆にセクハラを告発した女性に対して損害賠償を請求する訴訟を提起すらしたが、結局二〇一九年に男性詩人の敗訴が確定した。男性詩人は一九六〇年代に獄中にあった詩人の救出運動を行なっていたとされるが、その一方で、多くの女性たちに対する抑圧を強要し続けていた。

朗読
天（てん）の魚（いを）
（石牟礼道子「苦海浄土」より）
構成・演出
馬場　豊
2023年6月18日（日）
二回公演（各1時間30分）
午前11時～
午後2時30分～
神言神学院（チャペル）
（名古屋市昭和区・南山大学東隣り）
問合わせ｜5月16日（火）～6月16日（金）
毎週月曜～金曜の午後3時～5時
TEL　090-9195-6981（担当・馬場）

前へ！
未解決 朝鮮女子勤労挺身隊問題

梁錦徳さんの近影

梁錦徳さんの息子、朴フェウン氏は語る

「第三者返済案の後は討論一度だけ、当局はわれわれと疎通しようとしない」

「強制動員被害」梁錦徳さん（九四）の息子、朴フェウン氏（六三）は、母親の頑丈なる助力者だった。梁さんが日本の裁判所に強制動員（徴用）損害賠償訴訟を起した時、訴訟の原稿を直接書いた。彼は去る三〇年間の法廷闘争を「母の自尊心を護るためのもの」と言った。

しかしこれらの闘いが、水の泡になる危機に処した。政府がこの三月、日本の戦犯企業の賠償を排除した「第三者返済」強制徴用解決案を発表したからだ。

一九四四年、一三歳だった梁さんは、「水準の高い教育を受けさせて上げる」という言葉に騙されて日本に行った。梁さんが着いた所は学校ではなく、三菱名古屋の飛行機工場だった。ここで毎日一二時間、ペンキ塗りをした。常に有毒物質に晒される環境だったが、マスクや手袋等の安全用品はくれなかった。翌年韓国に帰って来るまで一七ヵ月間働いたが、賃金は一銭も貰えなかった。

過酷な労働は、梁さんの一生に深い傷跡を残した。

朴氏は「一九六〇年代に民防訓練のサイレンが鳴ると、母が不安がる姿を何回も見た。強制動員当時、工場でサイレンの音を聞きながら働いたトラウマのせい」と言い、「母のように精神力の強い方が、そんな姿を見せたて驚いた」と語った。

梁さんは一九九二年、日本の裁判所で、三菱重工業を相手に損害賠償訴訟を起したが敗訴した。梁さんは二〇一二年韓国の裁判所で再び損害賠償訴訟を起し、二〇一八年大法院で最終勝訴判決を受けた。

朴氏は「判決があって『遂に闘って勝ったのだ』という成就感がした。母も日本の謝罪・賠償が成されるものと期待をしていた」と回想した。

しかし三菱重工業は、判決を履行しなかった。朴氏は「日本が再び時間稼ぎに出たと聞き、母は『そんなものか』と大きく失望した」と言った。

朴氏は政府が一方的に「第三者返済案」を発表するのを見て、憤怒を感じた。

彼は「見せかけで一度討論会を開いただけで、政府は一度もわれわれとまともに疎通をしたことがない」として、「被害は日本の戦犯企業から受けたのに、韓国の企業からお金を集めて被害者に与えるというのは受け入れられない」と言った。

【訳＝李洋秀氏】

【韓国・京郷新聞 2023年5月9日】

★ごあんない★

邑翠文化フォーラムの願い

邑翠は、緑に包まれた爽やかな空間の意

朝鮮半島と日本との間には古代から交流が脈々と続いてきたことは明治いらいの考古学、歴史の研究によって明らかになって来ています。日本人のDNAに半島から渡来した人々の影響があることも否定できません。

2002年のワールドカップドの日韓共催を前に当時の天皇、現在の上皇様が「わが天皇家も古代においては、天皇の夫人に百済王族系の女性が迎えられているなどで、韓国には強いゆかりを感じています。」と述べられた事も記意に残っています。

21世紀の今、東海地方には多彩な人々が住んでいます。日本人は、もちろん、二つの祖国に別れている在日の人々に日本籍にかえた元在日の人々、そして、増え続けるニューカマーが混在していますが、相互の交流がほとんと無いまま時には反発しあう人たちもいます。

邑翠フォーラムは、こうした現状に一石を投じようと考えています。継続的な講座の開催で古代いらいの半島と日本との文化的交流の歴史を確認してもらい、受講した人々が夫々の立場を超えて互いを認め合い対話を始めるよう努力するつもりです。

こうした考え方に共感しているのが、すでに 25年間、日韓の民間交流の実績を積んできた日韓市民ネットワーク・なごやなので、この団体と協力しながら、講座を継続し、多文化共生に、わずかでも尽力したいと考えています。

講座「朝鮮半島と日本との交流史」

第1回シリーズ

こうして人々は波濤を越えた!!

［講師］西谷 正（九州大学名誉教授）

［会場］名古屋国際センター大ホール

■名古屋駅から東へ徒歩7分

■地下鉄桜通線「国際センター」駅下車すぐ

アクセス

［参加費］1回1000円（定員120名）学生無料

❷ 6月11日（日）14:00～

百済からの渡来文化

～文化大国の栄光映えて～

❸ 7月9日（日）14:00～

新羅からの渡来文化～新興武力国家の威光～

❹ 8月6日（日）14:00～

加耶からの渡来文化～一衣帯水の絆ここに！～

お申し込み

WEBでのお申し込み

右記のQRコードからお申込みください⇒

FAXでのお申し込み

下記のフォームにご記入の上、0568-84-8674までお願いします。

［お問合せ］邑翠文化フォーラム事務局　Park 080-8250-2452

講座 朝鮮半島と日本との交流史 第1回シリーズ

FAX 0568-84-8674

名前	（フリガナ　　）	職業		参加回	❶・❷・❸・❹ ※参加回に○をつけてください。
連絡先	※電話番号またはメールアドレスをご記入ください。				

歴史の心

第４講　往五天竺国伝・新羅の高僧

金　宗　鎮
（社協東海支部会長）

慧超の旅行記
『往五天竺国伝』

天竺に求法した、玄奘法師（六〇二～六六四）は、知らぬ人がいないほど、広く知られている。少年の頃、『西遊記』『孫悟空』の物語を何冊読んだか知れない。

ところが、天竺に求法した、新羅の僧たちは余り知られていない。

サルとブタとカッパの同伴がなかったせいかも知れないが、新羅の僧でインドへ行った、恵業・玄泰・求本・恵輪・玄道等の学問僧がいた。

仏教はアジアの一つの思想潮流であったので、新羅僧は天竺へ求法に旅立った。

ここに『往五天竺国伝』をのこした慧超（ヘチョ　七〇四～七八七）のインド五国の求法の道をみる。

慧超は新羅から西安、長安へ行き、海路で東部インドに上陸し、クシナ国に到着した。釈迦牟尼が逝去した地である。

僧慧超は、中天竺、南天竺、西天竺、北天竺へ、そしてヒマラヤ山（雪山）をすぎて、チベット（吐蕃）に隷属されていた小国に至る。

パンジャブ地方へ、カシミールへ、その後ガンダーラへ、そこからインダス川上流に至る。ついにはアフガニスタン、ペルシャ、サラセン～アラビアに至る。そしてシリアへ、ビザンチン、トルコ等々。

慧超は十万余里を徒歩で歩いた。玄奘の徒歩をはるかに超えている。三年の歩みである。慧超の大旅行記はフランス人ペリオによって敦煌で発見された。新羅僧の「天竺求法」は後期新羅仏教の盛んな姿であった。

仏教はスリランカ、ミャンマー、タイ、カンボジアの東南アジアに伝わり、中国へは後一世紀、朝鮮には三七二年、日本には六世紀（五三八年、二年の二説あり）に伝来した。

六世紀を以て、東アジアの世界仏教圏の形成を見る。

日本への伝来は百済からであったが、後期新羅の日本仏教への影響はこれまた大であった。

仏教は「世界」を思想した。この世のすべてのものは原因や条件によって成り立つ（縁起）、それ自体の固定的な永遠の本体はもたない。すべては変化し、消滅する（諸法無我）、絶えず消滅変化する（諸行無我・諸行無常）。

執着から解放されれば、静けさの境地（涅槃）を実現することができる、と世界を哲学する。

新羅の高僧、慧超のインド紀行は、曺喜勝・著の『朝鮮の絹とシルクロード』（二〇〇七年発行）研究による。曺氏は岡山県からの帰国者で、社会科学院歴史研究所所長である。筆者のピョンヤン訪問の際に、上記の著書をプレゼントされた。訪朝の度に、お会いする機会を持ったが、筆者は、日本の朝鮮通信使の学術研究の状況、貫井正之氏、仲尾宏氏の著作をおくった。

韓国での朝鮮通信使研究の実情は、ソウルの中央図書館での出版の状況等を一報した。

その後の訪朝で、氏の紹介により、朝鮮通信使の若手研究者との面談も実現した。残念なことに、仏教史研究者と

の交流の機会は持つことがなかった。仏教研究の実情は知ることがなかったが、その後、『高麗大蔵経』全集がハングルで発行・販売されたので、手に入れた。（原文は世界遺産）

八万一千余枚に及ぶ版木に、一切の経文を集大成したもので、仏教研究の一級史料の出版が、朝鮮学界によってハングルで出版された意義は大きい。

筆者は『高麗大蔵経』にかじりついたが、全く歯が立たなかった。

※　※　※

求法と布教。東アジア仏教圏の形成と深化において、朝鮮仏教界の位置は特異であった。

インド、中国、日本の仏教界を往来すること朝鮮僧の如く、深く広く多く往来した歴史は他に見られない。

高句麗・百済・新羅仏教界の、それを前期とすれば、後期新羅以後を後期と区分できる。

前期の仏教往来の研究に、朝鮮史学界の金錫亨、曺喜勝両氏の研究が突出している。後期の研究に田村圓澄氏と鎌田茂雄氏の研究が際立つ。

思想としての仏教はそれによって、同時代の儒学の「人材論・政治論」は仁・義・礼・智をこえる存在となった、と考える。

仏教圏における、新羅仏教は大いなる開花期を迎えた。

後期新羅の仏教開花は、仏教圏の中にあって実に活発であった。中国との関係において、新羅の仏教界は中国に学問僧を積極的に送った。

『古代朝鮮仏教と日本仏教』（田村圓澄・吉川弘文館）は、朝鮮の『三国史記』『三国遺事』、中国の『海東高僧伝』等の研究によって、新羅の仏教界は五四九年から六七〇年までの間に、中国に三〇名近くの学問僧を留学させたと記している。氏は『唐仏教界に学ぶ姿勢を、二世紀以上にわたって持ち続けている新羅仏教界は、日本の仏教界からすれば、より高度の水準に達しており、学ぶに価すると考えられた。』と述べる。

『韓国文化史』（梨花女子大、韓国文化史編纂委員会）は後期新羅の仏教を次のように評する。

・・・義湘・元暁・慧超・圓測など、今も仏教史に不滅の地位を占めている彼らは、すべてこの時代に輩出した。

元暁による和諍思想、義湘による新羅華厳教学の成立、そして圓測による新羅唯識学の展開はその良い例になろう。数百篇に達する新羅僧侶たちの著述目録を見出すことができる。

・・・一方、新羅仏教の隆盛は海外にまでその仏教文化を伝播することになった。

・・・一方、日本の僧侶で新羅に留学した例もある。

・・・浄土教が大きく流行した。簡単な念仏だけで西方浄土に行くことができると信じたからだ。

『古代朝鮮仏教と日本仏教』（田村）は後期新羅の仏教の日本仏教への影響について詳述する。

・・・当時の日本の仏教界が先進仏教国として範を仰いだ新羅の元暁と重なる行基の姿を論じている。そして律令体制下の日本の仏教教団の僧綱（七一七年）について、首座の僧正の義淵は百済系の出身、大僧都の観成は新羅学問僧、少僧都の弁通、律師観成も新羅に留学している。

留学した学問僧たちは帰国に際し、元暁の著作を将来した。

・・・白鳳時代の四十年間は、新羅学問僧の時代であった。新羅に留学する学問僧がつづき、そして日本の仏教界は、百済仏教に直結した飛鳥仏教と異なり、新羅仏教に直結する形になる。

※　※　※

『古代朝鮮仏教と日本仏教』（田村）の論ずる「行基と新羅仏教」は核心的記述であろう。

・・・行基の民衆仏教運動が系譜的に新羅の元暁を継ぐものであり、そして行基当時の日本の仏教界が新羅学問僧の経歴者によって指導せられていた事実に注目した。

元暁（ウォン　ヒョ）はガンギョウ、ゲンギョウと日本で呼ばれているが、元暁は朝

鮮の『三国遺事』に詳しい。そして宋の高僧伝にも伝記が記されている東アジアの名僧である。

元暁の著作は、一〇七種二三巻とされるが、『金剛三昧論』は、中国に伝えられると、まるで菩薩が書いたものとの評価を得て、当初の「疏」から「論」に格上げされたという。

『三国史記』に元暁の言葉「心が生じてこそ あらゆる事物や法が生じる」が残されている。仏教界のあかつき（天暁）とあがめられた高僧の心は、まさに色即是空、空即是色である。

入唐求法の旅に発つが、道中に火が暮れて野宿する。夜中に喉が渇いたので水を飲むが、朝、目が覚めて驚いたことに、水を飲んだ器が頭蓋骨であった。思わず水を吐き出そうとして、元暁は一心が生じてこそ、あらゆる事物や法が生じる、心がなければ、骸骨と少しも変わらない～と悟る。元暁は唐行きをやめて、修行をつみ、元暁宗の教義を編み、民衆の中に入り、貧困と病に苦しむ民衆の救済に力を尽くした。

元暁の『無碍』の思想である。唐に伝わり、人々は初地の階位に入ったと高僧と称えたという。

教訓を学ぶ

信念を貫き通した活動家
金甲生氏逝去半年に際して

愛知朝鮮学園理事長 文光喜

二一世紀、二三年の歳月が過ぎ、在日同胞はすでに定住志向に変わった。植民地時代に様々な理由により、渡日して故郷へ帰れず、日本での生活を余儀なくされた、在日一世の同胞は数少ない。

金甲生氏も一世であったが、昨年一〇月一一日九三歳で逝去された。コロナ渦で家族葬により執り行われたので、亡くなったことも知らなかったという人も多い。金甲生氏は一九二九年三月一一日、韓国全羅南道武安郡慈恩面分圭里で生まれ、父親と一緒に渡日して大阪で解放を迎え、一生を通して在日朝鮮人運動に身を捧げた活動家である。彼の一生は解放後から朝鮮総聯の結成そして、帰国事業を積極的に推し進めた第一期と日韓条約の締結と定住志向に合わせた諸権利（民族教育・朝銀・商工会等団体）を獲得させた第二期に分けて見る。特に今年、朝鮮総聯結成六八周年、帰国事業六四周年

故 金甲生さんとご夫人（2005年）

1961年ごろ、帰国者に渡す花束を持つご夫人

を彼の一生と絡ませながら、歴史的な教訓を学びたいと思う。

在日朝鮮人社会の誕生

一九四五年八月、三六年に及ぶ植民地支配から解放されたが、故郷へ帰れなかった（戻ってきた人も含む）人たちは在日朝鮮人となった。解放後日本には二四〇万人ほどいて、一八〇万人が帰ったという。東京を始め主要都市では、在日本朝鮮人聯盟（一九四五年一〇月一五日結成、以下朝聯）が結成され、同胞たちの生活権や帰国問題、諸権利擁護のために活動した。朝聯は全国に五四〇の支部と分会、初等学院五二五ヵ所に四万二一八二人、中学校四校一一八〇人を擁し、一〇〇万部を超える教科書を編纂出版した。貧困家庭の援助、日本人との対立調停や外国人の財産取得権利を獲得したのは朝聯の偉業であった。

朝聯の一指導者、金天海（一三年間、獄中非転向）は、戦後日本共産党の中央委員、朝聯の朝鮮人部長・最高顧問として、「一国一党」の原則により、朝鮮人党員を日本の民主化と朝鮮の解放・独立を結び付け指導した。

金甲生青年は解放後、静岡県の清水地域で民青（朝鮮民主青年同盟）活動に身を投じたが、四九年、GHQと政府により「団体等規制令」で民青は解散させられた。金さんは一九五〇年に「解放救援会」清水支部総務部長、五三年まで「祖国防衛委員会」（日本共産党の民族対策部の指導の下、五一年結成）静岡県委員長を務め、朝鮮戦争勝利のため、米軍の軍需品の生産・輸送の反対闘争や三反闘争（反米・反吉田・反再軍備）を展開したがその勇猛さは後日まで語り草になっている。

五二年七月の名古屋大須事件には関南采氏（三重県委員長・故人）、李日宰氏らとともにデモ行進に参加したという。五三年からは岐阜県「民愛青（民戦の傘下団体）」委員長を務めたが、朝鮮総聯結成後には朝青（総聯の傘下団体・在日本朝鮮青年同盟）本部委員長を務めた。

コミンテルンが定めた「一国一党の原則」により、在仏中のホーチミンや鄧小平はフランス共産党に所属し、抗日パルチザン闘争もそれに従ったように、解放後、独立国家の在日朝鮮人運動も居住地の運動に所属していたが、混乱に陥っていた。

路線転換方針と総聯結成

在日朝鮮人運動の渦中で唯一光明を照らしたのが、金日成首相の路線転換方針である。この方針は朝鮮戦争の最中、在日朝鮮人が左傾的で冒険的な闘争に参加し、多くの犠牲者を出したことを顧みながら「朝鮮人は自らの祖国、朝鮮民主主議人民共和国を擁護し、祖国の統一独立のために戦わなければならない」とした。金日成首相は、徳田球一書記長と同時に中国とソ連にも手紙を送ったことを述べている。徳田は毛沢東やスターリンの意見を受け入れ金首相の意見に同意したという。

朝鮮戦争の停戦後、一九五四年六月、周恩来はジュネーブでネルーと会談し平和五原則を発表し、世界各国間の内政不干渉が確認された。八月三〇日、朝鮮の南日外相は「在日朝鮮人は共和国公民として正当な権利を保障されるべき」と日本政府に要求し、在日朝鮮人が日本共産党の指導を離れ、日本の内政に関与しないことを示唆した。

金日成首相は一九五四年九月中国訪問時、北京滞留中の野坂参三ら日本共産党幹部と会見し、日本共産党による在日朝鮮人運動指導の放棄について協議した。日本共産党は後に極左冒険主義の自己批判とともに、民対の解散、朝鮮人党員の離党を正式に決定した。

韓徳銖祖国統一民主主義戦線中央委員らはこの方針

を具現し、在日朝鮮人運動において初めて主体的運動路線を確立したのである。一九五五年三月「民戦」第一九回中央委員会で韓徳銖議長は路線転換を提示して、五月二五日に在日本朝鮮人総聯合会は正式に八大綱領を採択し、新たなスタートを切ったのである。

戦後日本人として初めて（五三年一一月）公式に、朝鮮を訪問したのは大山郁夫参議院議員と共産党の亀田東伍であった。大山は世界平和評議会総会に出席した後、金日成首相とも会見した。五四年には、岡田春夫（労農党）、櫛田ふき、黒田寿男（労農党）、平野義太郎、福島要一らが訪朝し、五五年一〇月は古屋貞夫社会党議員団と金日成首相は会見した。

このような朝日関係が急変する中、金甲生氏は、岐阜県で総聯結成後、朝青委員長、組織副部長を務めているときに総聯本部宣伝部長の妹の金淑姫氏と結婚した。

しかし日本は北朝鮮との貿易・文化交流を一切禁止する厳しい方針を内閣で確認していた。それでも、五六年二月、宮腰喜助議員（日朝協会貿易委員会副委員長）は訪朝し、田辺日ソ貿易会専務理事らが日朝貿易連絡会を結成して日朝貿易会に発展させた。同年六月には東工物産、東邦商会、和光交易、湊商会の代表が訪朝し取引契約を結び、九月に戦後初めて正規の北朝鮮貿易（無煙炭輸入）が行われた。同年一〇月には自民党、労農党の議員が平壌で、共同コミュニケを発表し、五七年九月には朝鮮国貿促と日朝貿易協定を結び通商代表部の設置、商品見本市の開催を合意した。

五九年三月には社会党岡田宗司国際局長が朝鮮国貿促の代表と会見し、日朝間の民間貿易協定の締結を協議し、日朝貿易が実現したのである。一九五九―六〇年、北朝鮮の対日輸入は激増したのである。現在の貿易高と比較しても驚きの数字だ。

朝鮮民主主義人民共和国の対日本貿易額
（1956年～1960年／単位　1,000円）

	対日輸入額	対日輸出額
1956	540	68
1957	20,175	404
1958	30	9,935
1959	73,956	5,916
1960	409,522	2,910

総聯結成が与えた影響

総聯は結成当初から、「祖国の戦後人民経済復旧事業に貢献する」ため帰国する同胞を送る運動を指針としていた。同年一二月二六日の衆議院外交委員会において、在日朝鮮人を北朝鮮に帰国させる用意があると重光外相の発言に対し、二九日南日外相は代表団を派遣する旨の声明を出した。朝鮮は進学希望者に関して、五六年、内閣決定第七号で「共和国北半部に来て進学することを希望する在日朝鮮人青年学生」に対し一人当たり二万・（旧貨）の生活準備金を支給し、「記念奨学金」を毎月支給する措置も講じた。当時、韓国政府が棄民政策で在外同胞を受け入れる方針を執らず、生活苦や就職難に悩み途方に暮れていた在日同胞は希望の入り口を朝鮮に求めたのである。そこへ朝鮮側は五八年七月に、内閣直属に対外文化連絡委員会を創設して対日接近のための幅広い局面展開を図る外交手段を講じていた。

在日朝鮮人の帰国問題は本質的に政治問題ではなく、「純粋な人道上の問題」として超党派的に支援された。在日朝鮮人帰国協力会（帰国協力会）の議長には古屋貞雄（日朝協会理事）、顧問には元首相であった鳩山一郎、浅沼稲次郎、宮本顕治等社会・共産両党の書記長が就き、幹事長には社会党の帆足計、幹事には宇都宮徳馬が就任する全国民的支援会であった。

総聯は一九五七年第三回大会で非公然組織を具体化

して、五八年の第四回大会以後は常任議長団の合議制から議長一人制に移行し、中央集権制に変え、帰国運動を全国民的な運動に広げた。第一船が出向して一一ヶ月になる第四六船で四万七九八七名（帰国者九万三三四〇名、日本国籍保有者六八三九名）所持金は一人平均二九一〇円、無一文が七割、生活保護者が三五％を占めていたという事実は在日同胞の現状を物語っている。しかし六一年には二万二八〇一名に減り、六二年には三四九七名に激減した。

金さんの家族は岐阜県裁縫技術集団の帰国者岐阜団長として義兄が帰国する折に、義父母も帰国したという。総聯の在日朝鮮人の帰国（出国許可）運動は本来南の本籍地を捨て、心の故郷を作る運動だったともいえる。今顧みた場合、帰国させた原因の一つは在日朝鮮人を貧しいままに放置し、適切な法的地位を与えなかった日本側にもあり「厄介払いをした」日本政府・日赤・日本人として反省を迫る論者もいる。

総聯結成以降、日朝間の交流は本格化し、民間レベルでの人的・物的交流が盛んになり、帰国事業は日朝関係において新しい転換点になった。当事者である在日朝鮮人は「帰国運動」と呼び、朝鮮当局は「帰国事業」とし、日本政府や日赤は「帰還業務」とし、韓国政府や民団は強制的な追放の意味を込めて「北送」とした。帰国事業は総聯を結びつける堅い絆となっていたが、六七年一二月第一五五船を最後に事実上の終わりを告げた。

民族教育に力を入れた総聯

母国語を学びたいとの思いから民族教育は帰国事業とともにピークを迎えた。金日成主席は一九五七年から今日に至るまで教育援助費（二〇二三年四月現在一六九回四九三億九七八七万円）を送ったのは、教育事業発展に大きな助けになった。

金甲生氏は六九年から、愛知県の八つの支部（西三、中川、名港、幡豆支部の総務、組織、宣伝部長、八九年まで、加茂、尾西、名南、名中支部）において支部委員長を歴任しながら、同胞大衆から支援を受け、運動を牽引していった。

八九年からは愛知朝鮮中高級学校教育会会長、在日朝鮮人愛知県教育会会長を務め、一九九二年、総聯第一二全大会で挙手して執行部に「教育援助費使用について」質問を投げかけたのは全参加者の注目を集める前代未聞の出来事（後に限られた範囲で公開される）であった。その後も、祖国平和統一協議会幹事、愛知囲碁協会会長を務め生の最後まで在日朝鮮人の権利擁護と祖国統一のため一生を捧げた熱烈な活動家の鏡であった。

朝鮮学校教育を在日朝鮮人のための「民族教育」としているのに対し、「国民教育」であるとして、様々な意見はあるが、民族のアイデンティティを継承していくのには欠かせない場である。今日、世界が認める民族教育の権利を確保していくためにも現状況の変化に対応していく教育に変換していく必要性が求められ若い世代は絶えずそれを求めている。

しかし、日本は新自由主義の価値観でグローバル経済大国・軍事大国を目指す限り、民族教育は目障りでしようがない。アメリカの掌の上で、その一翼を担う装いで、民族教育に対しては常に抑圧と差別の政策で応えている。

二〇〇二年平壌宣言では「朝鮮の人々に多大な苦痛と損害を与えたという歴史の事実を謙虚に受け止め、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明」としたが何ら前進はない。朝鮮との問題はすべてが未解決であり、植民地支配の清算の問題も残され、「解決済」論は通用しなくなっている。それは植民地支配の三

六年間も含まれるが、戦後七八年の責任も問われるであろう。

拉致問題を前面に出して遅らせようとしてもいずれ解決しないと、日本人妻の問題も含め、日韓基本条約・協定の修正・補完は不可避である。六五年請求権協定時、韓国を「唯一政府」とした日韓条約第三条、九一年南北国連同時加盟によって「失効」している。九八年の日中共同宣言に「中国侵略によって中国国民に与えた災難と損害を与えた責任を痛感し、深い反省を表明」したことから、村山首相談話は、国際条約となり、これを否定することは条約違反になるであろう。日本、中国、韓国、そして朝鮮と東北アジア共同体の形成のためには、日本が真摯に自国の近・現代史に向き合う以外に道はないのである。

おわりに

在日朝鮮人の帰国問題は一九五九年から、六四年以上過ぎて、問題意識をどのように捉えるかは様々である。拉致問題や核問題をめぐる日本人の朝鮮や総聯に対する考えが、過去歴史を遡って帰国運動を推進した人たちに責任を追及すると言うが、果たして本当に彼らだけの問題だろうか。十万人の帰国者一世は亡くなり、今は三世四世に至っているが、それもコロナ渦によって途絶えた状況である。日本国内では（拉致を犯した）北朝鮮とは、国交正常化をすべきではないという主張と、逆に、（拉致解決のためにも）出来るだけ早く国交正常化しなければならないという主張が対立している。そうした中で、難民申請中の外国人の強制送還を可能にする「入管難民法改正案」が五月に可決された。日本で生まれ育った子どもたちの人権を粗末に扱う法律が通ることは、朝鮮学校差別問題とは密接に結びついているとしか思えないのは、私だけだろうか。

日本国憲法の施行後、七六年がたつが、いまだに日本には人権蹂躙の数々が見受けられる。拉致の問題で他国を攻撃し、何の罪もない在日コリアンや外国の子どもたちが差別されることは、人権とは何かを考えるきっかけになれば良いと思われる。

故金甲生氏のご冥福を祈る。（二〇二三・五・一五）

【参考資料】

高崎宗司・朴正鎮『帰国運動とは何だったのか』平凡社 2005年

岡本隆司・飯田洋介・後藤春美『国際平和を歴史的に考える』山川出版社 2022年

木村光彦・安部桂司『戦後日朝関係の研究―対日工作と物質調達』知泉書館 2008年

ピースあいち企画展

沖縄から平和を考える

―ウチナーとヤマトの架け橋に

2023年5月16日[火]～7月8日[土]

展示内容　沖縄準常設展より（3階）

（博物館相当施設）
戦争と平和の資料館　ピースあいち

○開館時間　11:00～16:00
○休館日　日曜、月曜、年末年始ほか
○入館料　大人300円　小中高生100円

〒465-0091名古屋市名東区よもぎ台2-820
TEL&FAX 052-602-4222
https://peace-aichi.com/

新型コロナ感染拡大等による状況によっては、臨時休館または展示内容等の変更があります。電話やHP・ツイッターでご確認ください。

いま面白い市民運動の情報誌

地元グループ紙誌 拝見

●半田・戦争を記録する会通信

（No.九二＝二〇二三・四・三十　発行＝同会／半田市）

○第十二回戦争と平和を考えるつどい／戦時歌謡と替え歌／五・一三　講師＝福岡猛志さん

○間違っていることには声をあげたい～坂本悠美子

○半田小学校で平和出前授業に鋭い質問　ほか

●愛労連

（第三五九号＝二〇二三・六　発行＝愛知県労働組合総連合／名古屋市熱田区）

○中小企業・非正規・最賃め人勧／物価高騰を上回る賃上げをすべての労働者に

○第９４回愛知県中央ＭＡＹＤＡＹ／働くものの団結で生活と権利を守り、平和と民主主義、中立の日本をめざそう！／誰もが普通に暮らせる賃金／働くルール／社会保障の確立

○春の組織拡大強化月間の成功で強く大きな愛労連へ／新人との対話で組合加入が進む　ほか

●あま東部

（No.一七一＝二〇二三・四・三　発行＝あま東部平和委員会／海部郡大治町）

○安保法制違憲訴訟／憲法判断なく請求棄却

○ドキュメンタリー映画『声をあげる高校生たち』／私たちの未来に核兵器も戦争もいらない／有原誠治監督の新作映像

○あいち平和映画祭プレ企画／教育への政治介入を目のあたりに　ほか

●とより通信

（第二七号＝二〇二三・四・二　発行＝朝鮮高校無償化ネット愛知／とよりの会／連絡先・愛知県豊明市）

○愛知無償化裁判支援の記録冊子出版記念会を開催しました！

○連続学習会「朝鮮学校の現状を知ろう①／三月二五日」

○関西・ＭＢＳラジオ番組（二月二一日）における上念司氏の差別発言問題について　ほか

●明日へ

（第八号＝二〇二三・四・二五　発行＝東海市の戦争を記録する会／東海市富木島町）

○三菱重工第五製作所知多飛行場関係固有財産引継調書

○戦時中の姫島～加古栄一

○疎開の思い出～児玉孝子　ほか

●日本とユーラシア・愛知版

（二〇二三・五・一五　編集＝同協会愛知県連合会／名古屋市東区）

○ロシアでの人権保障はどうなっている？／治安立法に対するロシア憲法裁判所の憲法判断～杉浦一孝

○【実施報告】ウズベキスタン料理レストラン／「タパスム」で『ペチカ』番外編

○【投稿】ウズベキスタンのタシケント／人と街と学校と①　ほか

●なごや市職

（第二三八一号＝二〇二三年五月一・十一日　発行＝名古屋市職員労働組合／名古屋市中区三の丸）

○楽しいことがいっぱいの市職労です／海だ！魚だ！ＢＢＱだ！／ｉｎ南ビーチランド

○職場の改善もつながりづくりも労働組合で実現しよう／総財支部・職場説明会開催

○第四九回東海自治体学校／年講演『世界と日本の新しい自治の胎動～世界の動向と杉並区での実践から』（岸本聡子さん）／五月一四日　ほか

革新・愛知の会

（第三三六号＝二〇二三・五

・十　発行＝平和・民主・革新の日本をめざす愛知の会／名古屋市熱田区）
○【インタビュー】布施祐仁さん／「安保三文書」で進む日米軍事一体化／外交こそ戦争を防ぎ平和を実現する力
○【近ごろ思うこと】坂井芳貴さん／沖縄「捨て石」への不安／ヤマトンチュは真摯に自分事として受け止めるべき
○【我が街の革新懇】革新あったの会・鈴木勝／地域とのつながりを重視、「市民と野党との共闘」署名活動なども「継続は力」で　ほか

●ポラム
（第一三七号＝二〇二三・五・二〇　発行＝岐阜朝鮮初中級学校の子どもたちを支援するポラムの会／岐阜市長良）
○【教室から】少年団～朴九令
○高賛成侑監督『ワタシタチハニンゲンダ』／映画を観て思ったこと考えたこと○　ほか

●瀬戸地下軍需工場跡を保存する会会報
（第一六五号＝二〇二三・五・十　発行＝同会／瀬戸市
○【ご案内】第二回愛航空研究会「パナマ運河攻撃機晴嵐二八号機修復の全貌」○
○三・二六　春の戦跡見学会報告／あなたがB29墜落の目撃者になる！
○瀬戸と周辺の戦跡探訪⑦／雨宮大尉自刃処碑　ほか

●平和新聞・愛知版
（二〇二三・五・一五　編集＝愛知県平和委員会／名古屋市東区）
○青年・学生部　憲法アンケート／青年の生活が苦しく、増税は許容できない
○憲法施行七六周年／多様性のある社会へ～私たちの行動で絶望に歯止めをかけよう
○一九六〇年安保闘争で闘った生き証人の講演／森賢一さん（八七）愛知県学連委員長（当時）、県平和委員会顧問　ほか

★全国各地の通信から

日朝協会

【福岡版】二〇二三・五
○【あれこれコリア】ヒウム日本軍「慰安婦」歴史館～田中美由紀
○【歴史カフェ】日本と朝鮮の近現代史／『征韓論』の呪縛一五〇年を解く⑭／草梁倭館～植山　渚
○【韓国のマスコミ】韓国史教科書、近現代史の比重が七七％？／四月十二日『朝鮮日報』コラム　ほか

【群馬版】二〇二三・四
○徴用工問題／韓国政府解決策と日韓首脳会談について
○原発は文明のお化け・福島を忘れない／原子力潜水艦～新井忠夫
○遠い日の記憶／三八度線を生き抜いて⑦～奥田雪子　ほか

【東京・中野版】二〇二三・四
○松田解子さんと橋場史子さん（上）／日常の会話から学んだこと～江田　徹
○いい嫁が来てくれた～石梨香

【埼玉版】二〇二三・五
○日本軍「慰安婦」の授業を大学生はどう受け止めたか～関原正裕
○関東大震災における朝鮮人

【大阪版】二〇二三・五
○非核神戸方式を学び／憲法・平和主義の大切さ実感
○岸田首相訪韓、謝罪なし
○【にっこりフィールドワーク】神戸のコリアン多住地長田と非核神戸方式、南京町を訪ねる　ほか

【表紙＝三浦雅子】

日本と朝鮮／愛知版　2023年5月(471)号
■発行／日朝協会（発行責任者＝宮川泰彦）■ 昭和 28年 11月30日　第三種郵便物認可
■編集／日朝協会愛知県連合会事務局 ■464-0853　名古屋市千種区小松町6-9-1
■Tel・Fax＝052-731三9445　■Eメール／y-koide@mse.biglobe.ne.jp
■サイト＝http://www.aichi-niccho.com　／　■ ㊐振込先＝0840-9-27721